



TITLE:

海外日誌(二十四)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(二十四). 天界 1925, 5(50): 91-94

ISSUE DATE:

1925-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160210>

RIGHT:

海外日誌 (二十四)

在外研究員 山本 一 清

八月一日(金)

朝、銀行を経て天文臺へ、天文臺で、幻燈畫を四枚作る。之れは来る日ダートマス大學に於ける天文學會での講演用である。

八月二日(土)

ヤークス天文臺のリー氏と、佛國リヨン天文臺長マスカル氏夫妻と、英國ダブリン大學天文臺のプランマー教授とが當天文臺に來られたので、今日は午後四時半から、シヤブレイ臺長宅の前庭の樹蔭でテイの饗があり、其の後、自分はシヤブレイ氏と共に四人の客を案内して、C館階下の寫眞室や精密自記光度計などを見た。リー氏は、其の後、リンネ通の自分の宅に立ち寄つて、英子に久しぶりの挨拶をせられた。

夜、田中峰谷兩氏を宅に招いて、別れの晚餐を共にした。兩氏は二三日の中に出發、歸朝せられる筈。

ヤークス天文臺のダンビー教授が二十四時鏡でエンケ彗星を發見したといふ電報があつた。

八月三日(日)

今日からニュー・ハンプシア州のハーバード市ダートマス大學で米國天文學會大會が開かれるので、それに出席のため、自分は、朝十時半、ボストン北停車場發の列車にのり、英子は宅に居残る。車中には同じハーバード天文臺からベイリ、キング、ミス・ガノン、ミス・モリ等の人々が同車したのみならず、プリンスストンのラッセル教授や、マウント・ホリヨーク、ミス、ナンタツケット等の女子大學からの人々も乗り、尙、佛國のマスカル夫妻や、英のプランマー氏も乗つたので、車中大賑はひ。——ホワイ・トリブナーからは乗合自働車を買切つて、ハ

ノブーに乗り込んだのは四時頃。

五時から、すぐ郊外の丘上にあるムース・クラブで一同夕食を饗せられた。集る者非常に多く、たゞに米國東岸の天文學者たちばかりでなく、西の加州からバリークのエトケン氏やカンベル御大や、ウイロン山のセント・ジョン氏も來て居り、又海をこえて英國からはエデントン、ジャクソン、ツエフリス氏等も來合せてゐるので、誠に愉快な會合である。自分はエデントン教授と暫らく話した。教授は、近頃英國ケンブリヂ大學に留學した日本の天文學者たちの評判などしてゐられた。

夜はマサチュセツ館にさまる。

八月四日(月)

朝、街路を散歩してゐるさ、物理教室のECロープス氏に呼び止められ、誘はれて、暫く郊外をドライブし、ライム村から引き返し、コンネカト河岸に沿ふ奇景を賞しながら大學に歸つた。十時からワイルダール館で、愈々、天文學會が開かれる。WWカンベル氏が座長となる。午前中は多く恒星視差に關する論文が讀まれ、次いで討論も盛んであつた。此の論文會は午後にも引き続く。自分は、此の日、太陽研究に關する一文を讀んだ。

午後から雨。夜には餘興さあつて、Lグリグス教授の動物寫眞の講演があつた。

八月五日(火)

朝食後、自分は大學のシヤタク天文臺を訪ひ、九時の赤道儀や、四時の子午環や、昔ヤング教授が太陽スペクトルの開拓的研究に用ゐたといふ有名な分光器などをロープス氏に見せて貰つた。

十時から論文會。始めに一同の求めにより、エデントン教授が「恒星の熱源」について一場の講演をせられた。午後にはラッセル教授が座長となり、佛國のマスカル教授の挨拶があつた。

午後六時、自分はハーバードのステツソン教授夫妻と共にロープス氏の實驗室に招かれ、其こで、珍らしい、念の入つた日本食の饗應を受けた。其後、自分はロープス氏宅を訪れて、十時過まで話す。

八月六日(水)

天文學會も今日午前中で終り、多くの人々は直ちに立つてカナダのトロント市に開かれる全英國科學會に行く筈である。今日の此所での會には來年一月末の日食觀測方法が討議せられた。

自分は、時間の都合上、會の開ちられる十數分前に退場、ローブス氏の自動車でホワイト・リバー驛まで見送られ、ベイリ教授やミス・モリーも同車して、ボストンに歸つた。ローケンブリガの宅に歸着したのは五時半頃。——今日は珍らしい暑さであつた。

八月七日(木)

午前中は天文臺。

午後、オーバーンの小林氏の紹介で、突然、小室英夫氏が宅へ來訪された。ひざい暑さなので外出は出來ず、晩まで室内で話す。

八月八日(金)

午前中、天文臺で、太陽小論の抜粹をタイプする。

午後、英子と共にボストンへ行き、フレンチ・ライン會社で來月の乗船をパリ號からロシヤンボー號に換へることを交渉した。之れは、若し出來れば九月十五日から獨逸ライプチヒで開かれるAG天文學會に出席したいためである。

歸途、グローブ劇場で早川雪洲の「デンジ・ライン」といふ寫眞を見た。可なり好く出てゐた。

八月九日(土)

ライプチヒ大學天文臺のナウマン氏へ、學會に出席希望の手紙を書く。

八月十日(日)

夕方、コンモンを散歩中、久方ぶりで安藏氏に會ひ、長い間立ち話し。それから誘はれて同氏の宅に行き、川上、西郷兩氏とも話す。

八月十一日(月)

大變に冷しい。

新聞電報によれば、昨日は日本に又々地震があつた由。

八月十二日(火)

スペイン行きの準備として、金三十五仙で西班牙語文典の古本一冊をスクエアで見つけた。餘暇に稽古すると決める。今日も大に涼しい。先週の今頃は、大變な違ひである。

八月十三日(水)

ワイルソン山のWSアダムス氏へ Some Notes on Solar Research を郵送した。

天文臺で、ミス・カノンに「海水浴へ行きたいのですが、此の寒さでは開口です」と、例によつて、元氣が盛んである。——六十幾歳の此の老嫗學者が!!

八月十四日(木)

先日来、天文臺での餘暇に一九二四・二四といふ新變光星の光度測定をやつてゐたのが、大體出來たので、何は兎もあれ、其のあらましの結果を其の発見者E. クラフ氏(獨逸ハムブルグ天文臺)に書き送る。

午後は英子と共にボストン行き。先づ、パーク・スクエア・アビルデンガ内の所得税局で届けと誓約をし、それから佛西獨蘭諸國の領事館をまはつた。

八月十五日(金)

天文臺では、自分是一九二四・二四星の光度測定を今少し続ける。英子は新しくケーブを作るので大忙。

八月十六日(土)

朝、スクエアの一書店でベテカールの獨逸の獨逸案内を見つけ、大喜び。少し舊版だけれど好く出てゐるので、之れでライプチヒに乗り込むことが出来る。

天文臺では一九二四・二四星の研究續行。變光週期は一〇〇日よりも九〇日の方が本統らしい。

夜、加藤氏來訪。

八月十七日(日)

数日前からの思ひ付きで、今日はウヅ・ホールに駒井氏を訪問する。きめ、朝七時半發の汽車に乗る。十時前に着。駒井氏夫妻と小室氏とに迎へられ、一旦同氏の宿で少憩後、案内されて此の地の臨海實驗所

を訪れ、其の内外の設備を見た。此所は米國諸大學からの持ち寄り世帯で經營してゐる由で、其の管理方法は非常に參考的だと思ひした。——それから、水族館を見、食事は俗に言ふ「メス」食堂で頂く。

午後三時には、約束により、英子と共に、當地滞在中のシヤブレイ臺長の一家族を訪問。四時からは一クラブで開かれる通俗講演會に皆々出かける。其所ではマーテン氏が「進歩とは何ぞや」といふ題で興味ある講演をせられたが、あまり米國式國粹主義者流の質問が出たりして面白かつた。米國の思想界は、今實に「日本のそれ以上に」混亂してゐる事が思はせられる。

夕方、食堂で晚餐を頂いた後、六時發の汽車で、元の道なボストンからケンブリヂ宅へ歸つたのは九時であつた。

八月十八日(月)

ふさ或る材料を見つけた、今朝は天文臺で警座(一九一八年)新星の後期の光度曲線の研究する。Lカンベル君より貸して貰つたAAVSの會員の觀測は個人差が大きくて、どうも、自分の目的には適當しない。

午後はマゼラン小雲中の比較的に光強い變光星を測つて見たが、之れも、手頃のものが少なくて、仲々骨が折れる。

夕食に、宅へ、加藤大橋兩氏をまねく。

八月十九日(火)

今日も天文臺ではマゼラン小雲の研究。

いよいよ出發の日が近づいたので、今夕は安藏川上西郷三氏を招いて別れの晚餐を供す。

八月二十日(水)

シヤブレイ臺長と、自分の太陽論文について相談。

夕方、安藏川上西郷三氏に招かれて、ボストンへ行き、支那食の御馳走。

八月二十一日(木)

自分の大小マゼラン雲中の變光星研究のまとめ方について、シヤブレイ臺長と長い相談をした。明日から其の仕事にかゝることとする。

午後四時から、自分と英子とは、天文臺のスター君に招かれ、電車と汽船と輕便汽車とに乗り繼いでウインズロブ濱の同氏別荘へ連れられて行き、晚餐後、暫く濱邊の散歩。それから宅で親子三人のグワイオリン合奏をきかせて貰つた。愉快な夕であつた。見送られて、十一時頃歸る。

八月二十二日(金)

今日の當地での午後六時といふ時に火星が地球との最近距離に來る二日前から、各地の新聞や雜誌は火星に關する誘發的な記事を掲げて、人々の注意をひいてゐる。新聞に現はれてゐるところでは、リクやロノエルやヤーキースやワシントン(海軍)等の天文臺が種々の記事材料を供給してゐるが、ウイルソン山や當ハーブードなどは熱心でない。主に火星専門家が居ないためであるが、それにしても、一般の社會に對する對度が少々眞面目を欠いてゐるやうでもある。——今日も當ハーブード天文臺へは朝から各種の新聞通信社あたりから絶えず電話がかゝつてゐたりしたけれど。

八月二十三日(土)

朝ね坊して、十一時頃天文臺へ行く。天文臺ではミス・ウヅが新星が発見したらしい。——夕方、西郷川上後藤田三氏が天文臺へ來られたので、内部を案内した。

夜、英子と共にボストンのミス・シャードを訪れて、暇乞ひの挨拶をした。ミスは例の日本人排日問題解決のため、宗教同盟と言つたやうなものな企てを、ゐられる。

八月二十四日(日)

早朝、オーホルンの吉田原治郎氏より來電。「今朝ボストンへ着く」といふので、自分は早速南停車場へ迎えに行つた。同氏は十一時到着それから取り敢へずケンブリヂの宅へ案内し、晝食。

午後、三時頃から英子と三人づれでボストンへ行き、コンモンで軍樂隊など聞いた後、支那人町で買物をしたり、トレモント街でベビー・ベギーの活畫を見たりして、夕方歸宅。

八月二十五日(月)

朝、吉田氏を連れて天文臺へ行き、内部を一通り見せた。正午歸宅の時には、少しまはり道して、ロングフェローの舊宅や公園を案内した。

午後には、又、吉田氏とホストン行き。ビルグリム出版部やYMCAや圖書館等を案内し、夕方歸宅。夕食には高山命持參の御馳走。

八月二十六日(火)

終日珍らしい臺雨で、外出は殆んど不可能。吉田氏も蟄居。夜は更けるまで話し込む。

八月二十七日(水)

御晝まへ、吉田氏は天文臺で元の臺長ヒケリング教授の研究室用の有名な回轉機の寫眞を撮った。其のアイデアに頗る感心して「日本へ歸つたら是非此の式の机を自分も作るだ」と繰り返してゐられる。

午後、自分はホストンの船會社へ行つて、又々、船をデ・グラス號に乗り換へるこの交渉をする。吉田氏はモルガン記念館行き。

八月二十八日(木)

朝から天文臺で水蛇の星の平均典線の計算をする。此の變光星は今まで研究したところでは、光の極大と極小との間隔が日數で略々同じく、それに、増光期間中に暫く休む時があつたりして、明かに之れはカンベル君の分類に據る第一型式に屬してゐる。

吉田氏はコンコード行き。

午後四時から、ホンド街のミス・カノンの宅で、自分等のために送別のテイ會が開かれ、シャブレイ臺長以下、天文臺の總ての人々が集まつた。涼しい樹蔭で茶菓を取りつゝ、話したり、寫眞を撮り合つたりして二時間ほど、まことに打ちくつるいだ集りであつた。英子は日本語を着た。ミス・カノンは未だ見ぬ自分等の小供等にイソソ物語を一冊自署して贈られた。

午後、二つのトランクと二つのストークスとをニウヨークへ發送す。

夕方、加藤茂木後藤田長嶺四君に招かれ、ホストンの支那料理店で送別晚餐會。

八月二十九日(金)

朝、銀行で現金を皆旅行用の小切手に作り換へた。それから天文臺へ行つて、シャブレイ臺長に水蛇星其の他の研究を全部提出。十一時からミス・カノンの室に呼ばれて、代表的な恒星スペクトルを一通り見せて貰ふ。昔し、ヒケリング教授が分光連星を發見した時のスペクトルの原板や、有名なベルセウス第二新星のスペクトルなど、學界の寶物とも言ふべき多くのものもあつた。

午後、英子と共にホストン行き。船會社で「いよく」デ・グラス號に乗船を取り決めた。

八月三十日(土)

朝、英子と共に天文臺へ行き、各室をまはつて暇乞ひ。自分は一九二四—二四星の最終の報告をシャブレイ臺長に提出。午後は在宅して荷造り。

午後四時過ぎ、吉田安藏其の他の諸君に見送られて、出發、ホストン南停車場を五時發のフォオルグ線——特別列車で、いよく長い馴染みの此の地を去る。——六時過ぎ、フォオルグー港で乗船、ロング・アイランド内海の靜かな波の上をニウヨークへ走る。夕食には、ケンブリチから持ち込んだ手製のおすしを食べる。

八月三十一日(日)

早朝、水の上から大ニウヨークの景色を眺めてゐる間も短かく、船は六時半頃、第十四突堤に着。此の日は日曜なので街路は極めて靜かである。自分等は荷物の仕末をした後、高架線でペンシルニア停車場へ行き、八時過ぎに發する急行で南行、ワシントン市に向ふ。

暑い車中に半日揺られ、午後二時半ワシントンのユニオン停車場着、電車で小笹旅館に入る。

夕方にはワシントンの目援きのあたりを散歩。珍らしい暑さで可なり苦んだ。新聞によれば今日の日中は華氏一〇七度であつたといふ。